

三時間の家出

浜松学芸高等学校

伊藤 柚葉

ゆずは

切片は本当に些細なことだった。母と喧嘩した。理由は、今となつては全く覚えていない。本当にみみっちいことだったんだと思う。母は悪い人じゃないけど、完璧でもない。母にはやや後ろ向きな考え方をしてしまう癖があつて、それは本人も自覚していた。私の何気ない一言が母に刺さり、反論され反論する。いつもの流れだった。

喉が熱くて痛い。そのせいで声が出せなくて、無言で家を出た。「行方知らずになつて

家族を心配させてやろう」というやたらデカイ意地を張って南方へ走った。

季節は冬。長袖のパーカーを着ているし、日も出ている。でもやつぱり肌寒い。家ととび出してとぼとぼ歩いているのはアスファルトの歩道。この町自体比較的田舎であり、数少ないスーパーのすぐ真向いで畑が耕されていることもしばしば。行方知らずにとは言ったものの、財布も行く当てもない。お世辞にも人の行き来が多いとは言えないこの町でも、多少歩いたところですぐ見つかつてしまうだろう。だからなるべく家族の知らない場所、私の知らない場所へ行きたいと思つた。

よくおやつ菓子パンを買いに行つたスーパーを通り過ぎて、少し経つた。大きな建物のない畑や田んぼの広がる平坦な景色がそこにはあつた。田んぼといつても、冬なので水などはいっちゃんないが。すると、その地平線とも呼べる一帯の向こう側に何か

見えた。巨大な煙突が重なり聳え立つ、ごみ集積場である。その隣には見覚えのある総合水泳場。あの集積場は小三のとき校外学習で行ったことがある。水泳場の方も去年、小学五年生の三十分間回泳でお世話になった覚えがある。懐かしい。そういえば水泳場にある温水プールはごみ集積場でごみを燃やした時に出た熱を再利用している、とか聞いたことがある。それが地球温暖化防止につながっている、とか。今や人間だけでなく建物同士でも助け合っているのだと考えると、とても感慨深かった。

そこからは冒険だった。でかでかと名前の書かれたトタン壁の工場。やたら殺風景な交差点に立地する大きなコンビニ。そうやってみるみる変化していく風景を見ると、もっと見てみたいと好奇心が湧いてくる。しかし、そうやって一歩、また一歩と足を踏み出すごとに、足取りは重くなっていく。建物の数も少なくなっていく。でも好奇心の方がずっと

大きくて、その重くなった足を無理やり動かし続けた。しばらくして、やけに広い畑の中にぽつんと、大きなマンションが建っているのが見えた。近くまで寄ってみると、思っていたより大きく、顔をほぼ真上に上げなければならなかった。見上げていたら首が痛み始めたのですぐ視界を歩道に戻す。すると、すぐ側に公園があるのが見えた。気をとられて気づかなかった。遊んでいるのは、私と同じ小学生だろうか。彼らの笑い声ひとつひとつが、私にのしかかってくる。何というか、ただただ誰かに責められているみたいな感覚だった。すると、ブランコから女の子が降りる。彼女は笑顔で誰かのところへ走っていく。女の子。恐らくは、母親。その子を迎える笑顔に、とてつもない既視感を感じて、続いた歩道を逃げるように走った。まだ、戻らない。戻れない。

どれくらい走っただろうか。恐る恐る後ろを振り向くと、先ほどの大きなマンションに

目を奪われて、緑の生い茂る公園などどうでもいいくらいに小さくなっていった。さて、マンションのあった住宅街を抜け再び畑と田んぼの広がる殺風景な景色が戻ってきたがどうしたものか、と気を取り直して顔を上げる。するとそこには「澤田接骨院」という古びた看板を掲げた、小さな建物がぼつんと佇んでいた。ただでさえ何もないところだからと好奇心を掻き立てられて、私は足を弾ませる。正面まで来てみると、傍若無人とでも言わんばかりに伸びている草木、修復の跡さえ感じられない屋根や壁。その、いわゆる廃屋じみた風貌に私は違和感を覚えた。硝子の扉から見える内観も、掃除など行き届いていない様子だった。するとその硝子のドアに、風に靡いて剥がれかけた紙が目にとまった。ほんの出来心で手に取り、読んだ。

「澤田接骨院院長 澤田康正儀 長きに渡る闘病の末 九十一歳にて永眠いたしました」

数時間か後。玄関までたどり着くと車から母が飛び出してきた。母はこれでもかというほどの迫真の表情で私に「どこ行ってたの」と問い詰めてきた。どうやら、私がいつまでたっても戻らないので警察を呼ぼうとしていたらしい。彼女の、私の肩をつかむ手は震えていた。でも、暖かかった。暖房の効いた家の壁掛け時計は、出た時刻から三時間進んでいた。

結局私はあの接骨院からさらに歩いていくことはなかった。これ以上進むな、戻れ、と言われていたような気がした。あの三時間、見えるもの全てが違って見えた。家族や友達と行った水泳場。たくさんの遊具と子供たちがいる公園。長年愛されてきたであろう接骨院。家出さえしなければ、あんなもの見ずに済んだ。でも、家出したからあんなものが見られた。

また後に知ったことだが、接骨院から続く道をさらに行くと、海が見えるらしい。年中

波が強くて、一度つかまえられたら戻れなくなるような、そんな場所が。

(静岡県浜松市)